

看護のアジェンダ

看護・医療界の“いま”を見つめ直し、読み解き、未来に向けたアジェンダ（検討課題）を提示します。

〈第245回〉

丸腰で向き合う

井部俊子
株式会社井部看護管理研究所
聖路加国際大学名誉教授

2025 年 4 月、医学書院で 25 年間〈ケアをひらく〉というシリーズの編集を担当されていた白石正明さんが、岩波書店から本を出したと人づてに聞いたので、これは読まねばなるまいと書店へはせ参じた。

「理解されるということは最大のケア」

白石さんは、2000 年に『ケア学』（広井良典著）という本を世に出してから、2024 年に定年退職するまで 43 冊を刊行した。シリーズは現在も続いている、2025 年 3 月時点で計 50 冊を数えると、著書『ケアと編集』（岩波新書、2025 年）で書いている。医学書院を定年退職するに当たって、雑誌『精神看護』（2024 年 3 月号）で〈ケアをひらく〉の一冊一冊について語った記事を読んだ岩波書店の奈倉龍祐さんに声をかけていただいたことがきっかけで、この本の執筆が始まったという。これで、出版社が医学書院ではなく岩波書店になったという点について私の合点がいった。

白石さんは「あとがき」で奈倉さんに対してこう書いている。「編集者の本を作る編集者は手の内が見透かされているようで、なかなかやりにくいと思う。しかしベイトソンやバフチンに関連した書をいくつか担当された奈倉さんの“ケア”と“編集”への着目と、その理解力には大いに助けられた。この本を書きながら、理解されるということは最大のケアなのだと知った」。私はこの「理解されるということは最大のケア」にはっとさせられ、深くうなずいた。

白石さんが「わたしの編集の先生」としている方が、北海道浦河町にある精神障害者の生活拠点「浦河べてるの家」のソーシャルワーカー・向谷地生良さんである。こうして私は、〈ケアをひらく〉シリーズの最新刊『向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか?』（聞き手：白石正明）を読む運びとなった。

なんとか丸腰で人に対する

向谷地さんと白石さんの対話が面白い。山姥（やまんば）が天井のところにいて、いつも自分を見張っているという、見かけはしゃきとした好青年の話がある。向谷地さんは（声を少し低めて）「私はじつは〇〇さんと同じような大変な圧迫を経験した人たちに教えてもらいながら、そういう人たちが安心してこれからがんばっていくた

めに、いろいろ参考になるようなことはないかなってことを、みなさんと一緒に考えたり研究するために、ここに勉強にきてる者です」と、自己紹介をして“研究会”が始まる。以下は“研究会”で繰り広げられる対話である。一部簡略化して本文（29～31 頁）から引用する。

「病室にいても大変なことっていうか、いろいろ圧迫があるってうかがったんですけど、今も変わりないですか?」「今も山姥にやられて困ってるんだ」「山姥ですか! 日本昔話とかに出てくるような?」「そうだよ」

それを聞いて、参加しているスタッフが「すいません、その山姥ってどんな方なんですか?」と聞くと、彼は絵を描いた。（「山姥は殺人鬼で、50～60 人が群れをなしている。14～15 人でひとつの軍団を作っていて、これが世代交代して、インペダー化するって言うんですよ」と向谷地さんが説明する。）「おいくつのときからこの山姥にやられているんですか?」「5 歳のときから」「5 歳ですか〜」「山姥がいるってどうやってわかるんですか?」「あ、いたのね」って気配でわかる。（この方はお母さんに暴力をふるって入院となっているのだ。）「こいつが母さんを襲った」「そんな山姥ならいないほうがいいですよね。帰ってくれとか言うんですか?」「いや、わからないけど、つい呼んじゃうんだよね」

「へえ〜、そうですか。この山姥って、あなたの人生をいろいろ狂わせたわけでしょう?」「だから戦争をしてきたんだ」「どういうときに山姥を呼ぶんですか?」「お腹が空いたときとか、体調悪いときとか、鬱っぽくなったときについ呼んでしまう」「へえーっ」

こうして彼の世界を分かち合っていくと、彼のなかに変化が起きてくると向谷地さんは言う。山姥が出てきても、言葉で反撃しても自分から山姥にアクセスしないようになってくるのである。「山姥のことは公安警察に任せることにしたんだ」と言い出した後（彼はそれを「無血革命」と言う）、彼は突然、山姥に結婚を申し込まれる。しかし「山姥も 80 歳で先長くないから」と考え、結婚の申し込みを断る。「このあたり

失われつつある看護の本質を取り戻すために NEO セミナー「看護の本質を語る、ともに考える」の話題より

2025 年 5 月 10 日、医学書院の運営する看護教育・研究のためのオンラインプラットフォーム NEO（Nursing Education On-line）が主催するセミナー「看護の本質を語る、ともに考える」が、医学書院（東京都文京区）にてハイブリット形式で開催された。一般社団法人日本て・あーて、TE・ARTE、推進協会代表理事の川嶋みどり氏と、文化人類学者の波平恵美子氏が登壇し、看護の本質とは何かをテーマに講演を行った。



●写真 講師を務めた川嶋みどり氏（左）、波平恵美子氏（右）

◆“触れる”ケアこそ看護の本質

川嶋氏の講演は、「ふれて心の声を聴く看護師の手」をテーマに行われた。同氏は、人と人との触れあいが希薄になった現代社会、特に COVID19 パンデミックに伴うソーシャルディスタンスの影響を背景に、看護師が患者に「触れない」傾向が強まっている現状に危機感を抱く。患者に直接“触れる”ことこそ看護の本質であり、看護独自の安楽ケアであるとその重要性を強調した氏は、「そばにいて、触れて、聴く」という行為を総合して「て・あーて」と称し、「看護師の手には患者の訴えを感じ取る力がある」と、手を用いたケアの重要性を訴えた。

続いて波平氏は、文化人類学者である自身と看護とのかわりを「不思議な縁」と表現し、半生を振り返った。大学院生時代、担当教授の紹介により看護専門学校で文化人類学の講義を担当したことが波平氏と看護教育の出合いだ。その後も看護師養成校で教鞭をとりながら、医療人類学の研究に取り組み、多くの医療者との交流を重ねてきた。「医療者ではない私が看護、医療の世界に長くかわり続けてきたからこそ見えてくるものがある。不思議な縁に導かれる中で出会った看護師たちに多くのことを学ばせてもらった」と自らの思いを語った。

◆2 大看護業務の間に生じた歪み

対談では、「看護の世界が変化する中で看護の本質がどう保たれるのか」との問いが波平氏から投げかけられた。これに対し川嶋氏は、本来の看護とは人間の生命力に働きかけ、生きる営みを支えることであり、医療の枠組みよりもはるかに大きいものであるとした上で、その本質は時代・環境の変化に左右されないことを強調した。こうした看護の本質は看護師の 2 大業務のうち「療養上の世話」により実現するが、近年の看護師を取り巻く環境の変化は「診療の補助」への偏重を助長しているとも主張し、本来の看護ができない葛藤を少なくない看護師が抱えている現状を憂慮した。この現状を踏まえて、「今は看護師不足ではなく『看護不足』の時代。看護本来の仕事を取り戻す必要がある」と川嶋氏は語った。

波平氏から続けて「実際の現場で本来の看護を実現しきれていないのはなぜか」と問いかけられた川嶋氏は、「約 170 万人いる看護師たちが現状を黙って受け入れる“サイレント集団”にとどまっていること」を理由として挙げた。優れた実践をしている訪問看護ステーションを紹介しながら、看護師同士で議論し、疑問に思ったことには声を上げることの大切さを訴えた。

参加者からは、「個人行動ではなく看護師全体で、本来の看護をする輪を広げていかなければならないと感じた」「私は業務ではなく看護をしているという意識を持てるように、看護を語る機会を現場で増やしたい」といった感想が寄せられ、セミナーは盛会のうちに終わった。

*

本セミナーのアーカイブ動画は NEO（右記 QR コード）にて会員登録者向けに現在公開中。本セミナー他、看護教育・研究に関するさまざまなコンテンツもご覧いただけます。



から、彼は自分の退院のことを言い始めたんですよ」と向谷地さんは語る。山姥を相手にしないというあしらい方に変わってきたと。

そして、向谷地さんは、オープンダイアログで大事なポリフォニーについて説明する。「やっぱり人って、他人と常に触れ合いながら、揉まれながら、だんだん人になっていくわけです。（中略）だけど今の時代どういうわけか、とげとげしたままで、ずっと丸くなるチャンスがないまま大人になって、生きづらさをかかえてる人たちがいる」。さらに、「対話ってある意味で、こすれ合いです」。

さらにこうも言う。「アセスメントって普通、専門家が、自分たちの持っている尺度に照らし合わせて物事をいわゆる客観的に見極めようとする目的で行うと思うんですけど、当事者研究もオープンダイアログも、そういう意味でのアセスメントは行わない」。「オープンダイアログや当事者研究が目指そうとしている専門性って、むしろ徹底してそういうものを置いて、なんとか丸腰で人に対して向き合っていくようなもの」。

この言葉に触れて、私も強く思った。看護師も、この丸腰で相手に向き合いたいものだ。

新しいリアルな老いから考える、ケアのカタチ

私的高齢者ケア論

川嶋みどり



94 歳、看護師。 当事者として考える、これからの高齢者ケア

高齢者は同質な老年期集団ではない。

当事者として経験する「老い」は、こんなにも多彩で、新鮮な驚きに満ちていた。

自らの加齢による変化を辿りながら、長年の看護師としての経験、老年看護学担当教員としての視点を重ねて高齢者ケアを捉え直す、個人的かつ主観的な高齢者ケア論。

序章	多様な高齢者像	目次
第 1 章	高齢者の生活と生活行動	
第 2 章	高齢者の心身の不具合	
第 3 章	高齢者の思いと行動	
第 4 章	認知症も和らぐ老いの輝き ——長期記憶のサブシステムから	
第 5 章	高齢者の自助と共助	

詳細はこちら

